

基 調 講 演

『ごちゃまぜ～地域を拓く共生福祉～』

社会福祉法人 佛子園 理事長 雄 谷 良 成

賛川 それでは早速ですが、基調講演の時間になりましたので、雄谷様にお願いしたいと思います。雄谷様、どうぞよろしくお願いいたします。

雄谷 皆さん、改めましてこんにちは。今日は、こういった60回の記念すべき大会にお呼びいただきまして、本当に心から感謝をしております。何よりも、こういったコロナ渦というところで、非常に息苦しい、重苦しい暮らしを強いられてきている国民の中で、いよいよコロナも、今から新しい局面を迎えようとしています。今日はそんなことで、皆さんと、このいろんな人が、子どもも、若者も、あるいはお年寄りも、障害のある人もない人も、日本人も外国人も、いろんな人が関わっていく。そうすると、どういった化学反応が起こるのか。そういったことを皆さんと考えていきたいと思います。それでは、自己紹介の代わりに私たちの法人の動画を用意いたしましたので、まずはそれを見ていただいてから始めていきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

雄谷 はい。ありがとうございます。それでは早速ですが、ごちゃまぜという言葉について少し皆さんと考えていきたいんですけど、今、動画で見ていただいた福祉的な側面もありますけど、実を言うと事業承継というエネルギーを持っているんですね。

これは石川県の南部の菌床シイタケですね。ほ

とんどのシイタケ農家が事業を承継できない、後継ぎがないんですね。この時期は特にたくさんシイタケが採れるんです。そうすると、1日放っておくともう商品にならなくなるということで、お休みが取れない。あるいは、先般もありましたが、爆発的に成長するときがある。そのときに決まった家族だけでやっている、もう収穫し切れない。そうすると、かさが開いて商品としては通じなくなる、そういった所に若者が行かないということが起こっているんですね。しかし、そういったことを技術的な支援を受けながら、教えてもらいながら、一方で、障害のある人や近所の人と一緒に働いていくとやれるんですね。この方も、実を言うと、これでシイタケ農家、40年ぐらいい働いている人なんですけれども、廃業しようとしていたところを、みんなで支えてきているわけです。

これは鳥取、南部町ですね。お豆腐屋さんも、やはり同じようなことが言えます。毎日決まった量を提供しなくてはいけないということで、それもなかなかままならなかったところを、地域の人たち、あるいは障害のある人たちと一緒に支えながら、事業を、町に唯一、1軒あった豆腐屋を守り始めたのであります。これは3.11の後に宮城県岩沼という所のホルモン焼き、ジンギスカン鍋で焼く非常においしい料理なんですけど、これが津波にのまれて、プレハブで震災以降、一生懸命やってきた方が、なかなかうまくいかない。それをみんなで売りながら、ごちゃまぜの拠点で支え

ていくということが起こっています。

私たちは、これで、私も還暦を超えて 61 歳になりましたけれど、私の法人の定年は 62 歳でありまして、いろいろなものに取り組んできました。これは平成 10 年に能登で始まったビール事業ですね。社会福祉法人では初めての醸造でした。最近クラフトビールということで有名になりましたけれども、なんと、うちのビール、2014 年には、ブルワリー・オブ・ザ・イヤーといって、日本のナンバーワンを取っているビールでもあります。これは実を言うと、ごちゃまぜの原点となった廃寺の再生プロジェクトです。以前はたくさんの方がお寺に集まっていた。しかし、どんどん檀家さんが減って、いよいよ廃寺に向かっていったわけですが、それを今度はみんなで使う場所として再生しました。

ここにいる足湯に漬かっている方の中には、知的障害の方もいれば、元気な高齢者の方もいれば、身体障害者の方もいれば認知症の方もいます。左側の方は、重度心身障害。ハイバックチェアの車いすで、首から下は動きません。ほとんど動かなかったですね。私たち、2 年間でリハビリをして、右左、それぞれ可動域が 15 度ぐらい回転されましたが、なかなかうまくいかなかった。そのときに、認知症の非常に重い方が、彼に自分のもらったゼリーを食べさせようとすると、彼は振り向くことができずに、目の前にザーっと、体にゼリーがかかってしまう。それは 2 週間も 3 週間もすると、食べられるようになってきたんですね。食べられるということはどういうことかっていうと、首の可動域が、われわれが 2 年かかって改善できなかったものが、大きく改善されたということなんです。一方、認知症で、週に 2 回も 3 回も深夜に外出をされる、このおばあちゃんは、毎日この西園寺にやって来て、彼にゼリーやプリンを食べてもらうっていうのが生きがいになって、なくなったわけではありませんが、深夜にお出掛けになることが随分減ったという。私たち福祉の人間をほったらかして、障害の重い人と認知症の重い方が

関わることで、双方が元気になるという例です。

高齢者や障害者、あるいは地域の住民や子どもたち。そんな人たちが関わっていく。この廃寺の周りは田んぼしかありません。コンビニに行くにも車で行かないといけないような不便な所です。周辺にも同じような規模の部落がありますが、皆全て人口減少です。ところが 10 年間で 55 世帯から、なんと 75 世帯、今 78 世帯まで増えています。この理由は何かと言うと、居心地がいいと。最初は障害のある人や認知症の人と関わることで驚くこともあったけれども、なぜか居心地がいい。そういった所に、外に出ていた若者や、あるいは外からやって来る人も増えたりしていったということですね。

こういった、人は人と関わることで、どんどん経済的な進捗もあるわけですね。これは JR 北陸本線の美川駅。ちっちゃいちっちゃい駅です。サンダーバードっていう特急が走っていますが、この駅は止まらないんですね。止まらないんですけど、サンダーバードにいつかは止まってほしいという思いで付けたらしいんですね。ところが夜になって、暗くなると、地域の不良の若者たちが駅にたむろして、たばこを吸ったり、ちょっとひやかしたりとかしながら、非常に怖い駅になっていた。女子中高生の送り迎えは必ず家の人がついてくるといようなことになっていました。その場所を、待合室ですよ。みんなが集まれるような場所に改装しました。社会福祉法人で駅ごと全部管理を受けているのは、これも日本で初めてでした。一部の隣接する商業施設を運営しているところはありますけれども、駅舎の掃除から全て任されているというのは、社会福祉法人では初めてでした。

そんな待合室ですが、当然ここでは電車待ちの受験生が勉強をしていたり、奥ではランチを食べている高齢者の人がいたり、いろんなことがだんだん進んでいくわけですね。そうすると、どんどん駅という所は、そもそも便利な所にありますから、どんどん人が集まって来る。演奏会なんかも勝手にやっちゃう。これを見ていただけたら分かるんですが、JR 北陸本線の乗降客数はおおむね

減っています。しかし、ちょうど矢印の所から、私たちが駅を管理するようになったんですね。V字回復しました。これ、日本ではまれだそうです。

そもそも駅の周辺に大きな商業施設ができたと言って言えば、もちろん乗降客数は増えるわけですけど、この駅の周りは人口減少です。空き家が増えている。そんな中で、なぜ乗降客数が増えてきたのかと、JRの皆さんが言うには、全国から人がやって来る。これは周辺の地域から、車いすや、あるいは障害のある方が居心地の良さで立ち寄る、車で通ってきた人が立ち寄る。ここの待合室、飲めるんですね。宴会もできます。ですから、そこで飲んで帰る、話して帰る、そんなことが楽しいということで乗降客数がV字回復したと。

これは今から8年前の、ごちゃまぜが政府に大きく認められたときのプロジェクトです。これは元の国立病院の跡地を利用したプロジェクトであります。古い古いシイの木があった。昔は、この周辺には住宅が一切建っていなかった。原生林のような場所だったんです。そんな所に、だんだん金沢大学が近くにやって来て、宅地が増えていった。高齢者や、あるいは障害者、子どもたち、地域の人たちで利用するようになると、どんどん増えてきた。これは2015年に、安倍総理が来られたときの写真です。いろんな方々がやって来てくれました。当時の石破創生大臣、あるいは馳文科大臣、私の高校の同級生なんですけれど、いろんな人に来ていただきました。野田聖子さんなんかも来られました。今の岸田総理が政調会長のときに自民党に呼んでいただいて、このごちゃまぜと経済の関わりについて話をさせていただきました。今、私の同級生の馳は知事になりまして、先ほどの西圓寺の開所のときに、是非そういった目的なら僕が一番風呂に入りたいということで、頭には雪が積もっているんですけど、こういつきって、同級生ってありがたいもんだなと思いました。

国会にも呼ばれて、いろんな話をさせていただきました。そんな中で、閣議決定文書の中に、

なんとごちゃまぜという言葉が入ったんですね。これはうれしかったですね。本来、閣議決定文書というのは、こういった単語、一般的に使わないんですね。ところが、どさくさに紛れてごちゃまぜという言葉が入ったというのが非常に。共生社会と言いますが、何かしっくりこないですね。地域包括とか、何か違和感がある。ごちゃまぜって言うと、元気な人も、そうでない人も、障害のある人もない人も、あまねく全ての人たちを包み込んでくれるような言葉なのかなというふうに感じています。それが『まち・ひと・しごと創成本部』で、『生涯活躍のまち』という行政用語になり、そしてそれが今、日本全国に広がろうとしています。1800弱の地方自治体があるうち、計画段階を進めようとしているところが、既に3分の1あります。そして計画段階から実施、実施からもう既に事業を開始されているというところが、もう120余りもありますから、この流れというのは、大きく日本の中で、この数年で変わっていくんだろうなというふうに思います。

私たちは何も、縦割りの福祉を進めようとしたわけではありません。子どもは子どもたちのことを一生懸命考えるし、障害のある人たちのことを一生懸命考え、高齢者の人たちのことを一生懸命考え、それが結果として縦割りになっていった。しかし地域には、それをひっくるめて進めていくような力が失われつつある。そんな中で、新しい形の社会保障を探していくという必要があるわけです。

私たちは、社会福祉法人の支援と、それから青年海外協力協会。私も青年海外協力隊員として20代のときに4年間ドミニカ共和国という所に行っていました。障害福祉の指導者、それから医療過疎地の病院建設というものを進めてきました。それが今、ジョイントベンチャーをしながら、日本各地に、このごちゃまぜの拠点を展開しようとしています。それに賛同した、いろんな団体の方々が、さらに参入してきているということで、この数年間で、さらにこれが3倍、4倍になっていきます。

これは、室蘭の連中が、トンギスカンという、羊の肉ではないんですね、豚の肉なんです。室蘭では焼き鳥というのを食べると豚肉なんですね。これ昔からだそうで、ジンギスカンもトンギスカンって、豚を使ったものがあるんですよ。これが大変おいしくて、これを、よし、じゃあ、みんなごちゃまぜ仲間だから、みんなで食べようやということで、全国のごちゃまぜ仲間へ声を掛けまして、みんなで、この鍋と肉を買って食べるということをしました。そうすると、だんだん全国で広がっていきまして、16日間で5.5トンの豚が売れました。1万2000食。このゴチャマーゼ中島という事業所は月に大体、5食ぐらい売っていたんですけど、16日間で1万2000食。供給できるかどうかというところに迷ったみたいですけども、やるって言って、寝ないで玉ねぎとかをむきながら、泣きながら作ったっていう話を聞きましたけど、みんなが応援して、それがなんと額で2200万円。純利益が700万円もあったっていうことで。僕たちは何かをしてあげようっていう感じでなくて、こんなコロナだから、おいしいものをビールと一緒に飲もうよって、食べようよって、そういう軽いノリだったんですけど。

これは沖縄のゴチャマーゼ、ごちゃまぜ沖縄という一般社団法人の連中が、今度はごちゃまぜミュージカル。子どもも若者も高齢者も障害のある人も外国人もみんな一緒になってミュージカルやったんですね。沖縄では一番大きなステージ。これを民間で使用するのは初めてだそうです。たくさんの人が、このステージを支えて、そして成功させてくれたんですね。来年は、このGOTCHA!!RALLYが今度は沖縄で、このガジュマルの木の下で、みんな集まろうという話になっています。こういったものが、どんどん日本中に広がっていったらいいなというふうに思っています。

これは輪島の例ですね。輪島は、ピークタイムでは4万8000人ぐらいの人口がいたんですが、今は2万6000人。これは奥能登ですから、単純に人口減少ということではなくて、輪島塗が、バ

ブルのときに140億円売っていたのが、今は30億円台。基幹産業が100億円以上失われると、そこで職を失うわけですから、全て労働人口は流出します。そういったことで急激な空き家、空き地ができたんですね。空き地ができたのは能登半島沖地震です。最近も地震が頻発しまして、皆さんには大変ご心配をおかけして、被害もそんなに大きくなかったんで、ほっとしています。私たちの拠点も、お皿ががらんと落ちたりとか、その程度のことです。これを今度は大掛かりなお金をかけずに、空き家をうまく改装しながら、人が集まる場所をつくっていく。これも全部、町のど真ん中ですね。これももう空き家になって長かったんですけど、これをみんなが使えるウェルネスにしたり、これは廃業してから長い診療所ですね。これをみんなが集まるママカフェにしたりとか、そんなことをしました。

これは割烹ですね。実を言うと、この前は文化的な建物で、200年ほど前には遊郭だったそうです。それを地元の人が割烹に再利用して、しかしその店主もやはりいなくなって、跡取りもいないということで売りに出されてしまった。それを僕たちはみんなで支えながら、コワーキングスペースにしたりとか、あるいは移住の人たちを受け入れたり、グループホームにしたりしながら、再利用しています。

これは、つぶれてしまったスナックの跡も、人を配置はできませんけれども、観光客の皆さんや、やって来るインバウンドの人たちのためにオートバイや自転車を収納できるように整備していきました。こういった町の真ん中ではありながら真っ暗闇になっていく。そんな所を歩くっていうのは非常に住民にとっても怖いわけですけども、そういった所に明かりをともししていく。幹線道路から1本入った所ですけども、今たくさんの人がやって来るようになりました。

人口集約をさせると、今度は公的な、いろんな交通網を配置することができます。今ちょうど、この拠点から、本当は観光案内のために商工会議所の皆さんがつくったんですけども、これを買

い物難民や通院難民の方に使わせてくれないかって言うと、自動運転の運用試験も開始したんですが、観光客の方と、認知症の人と障害のある人と、みんな一緒になって乗っているんです。これがまた、観光客の人には非常に評判がいい、インバウンドの人にも評判がいいんですね。

大量消費の時代には、おいしいものを食べる、あるいは素敵なものを見る。大変いいことですけれども、この私たちの拠点は日常です。非日常ではないんですね。ですから、地域の人が温泉に入りに来て、腹巻き一丁で温泉に入って、そして風呂上がりビールを飲んで、地域の人とざっくばらんに話をして、そんな場所ですから、インバウンドの外国人なんかやってくると物珍しいんですね。ところが、地元の人との会話が楽しい。そして穴場になるような飲食店を紹介してもらおう。そんなことがリピートにつながっているんです。コロナ前にはすごい数のリピーターが来ていましたが、コロナになってさすがに来れなくなった。最近また復活し始めています。ようやく来れたことによって人たちが、たくさん来るようになりました。こんなことの中で、私たちもバリアフリーということで総理大臣表彰を受けることができました。

これは宮城県岩沼の例ですね。先ほど紹介させていただきましたが、私は青年海外協力隊員として4年間ドミニカ共和国に行っていました。3.11の直後からOB、OG、全国に5万人おりますが、半年で6000人ぐらい、復旧のための支援に入っていました。それから全国から集めたボランティアは撤退しましたが、それでも張り付いて、ずっと復旧から復興へ、そして創生フェーズに持っていくために私たちは11年間、今やってきたわけです。これは岩沼の例ですね。この右側の所が海で、津波にドーンとのまれて、この沿岸地域にいた人たちはみんな、家ごと家族も失うというような、一番悲惨な場所でした。この内陸部には仙台空港もありますけど、仙台空港も津波にのまれているわけです。このピンクの所で、今、私たちは拠点をつくってオープンさせました。仮設住宅というのがあって、そこからいよいよ昨年に

本移住、全員終わらせました。

東北の仮設住宅の設置の中で唯一、自死がなかった所です。なぜ自死がなかったか。私たちが支援に入って一番困るのは、このハイリスクの人たちの情報です。ところが、ほとんどの場合、この岩沼を除いて全ての場合は、抽選です。そうすると、家をなくしている、場合によっては家族を亡くしている、そしてプレハブの壁1枚で、隣に入ってくる人がどんな人か分からない、トリプルストレスになるんですね。子どもが泣こうものなら、隣の人からは、ドーンとやられてしまう。そういうストレスが起こる。

ところが、この岩沼の仮設だけは地域ごと移したんです。そうすると、私たちが支援に入ったときに、何よりも、あのばあちゃん、もう、1人になったから、是非あそこが一番最初に行ってくれっていう情報がいち早く入るんですね。そういった情報が、手遅れにならずに済んだ大きな理由だったんです。危ない、ハイリスクのメンバーの所に1週間、2週間で行けるかどうかというの、大きく分かれたわけですね。関わる頻度を上げていく。家族で支え合える人たちは少し頻度を下げてサポートをする。そういったことができたところが、自死を防いだところにつながりました。国土強靱化と言いますが、確かに道路や橋を強くすることは大切なことですが、ここから学ぶことは、人と人がしっかりとつながっていくということが国土の強靱化の本当のところではないのかというふうに感じさせてくれるような出来事だったと思います。

今もう、危険地域となって入れない所ですが、メガソーラーがたくさんできました。本当に無機質な感じで、非常に味気ない場所に、そこに羊を放しました、地元の人と相談をしながら、そして子どもたちもお世話をしたり。この人たちは、みんなのまれた場所、ここで生まれ、お墓もなくし。でも全てなくなったこの場所に、またきちんとみんなが戻ってくるように復興させたいっていう人たちの集まりを支えています。動物だけではなくて、野菜も作るとかして、みんなでごちゃまぜになり

ながら作って、いろんなものが取れましたね。

という中で、私たちの拠点ができたわけです。ここはもう、青年海外協力協会ですから、たくさん外国人がやって来て、保育園の子どもたちにいろんな言葉で話し掛けたり、いろんな文化を紹介したりしています。子どもたちは、いろんな人たちと関わることで、大きく大きく成長していくんですね。温泉にも一緒に入る。

私たちは何も、先ほど言いましたが、誰かを排除しようと思って縦割りの福祉を進めてきたわけではありません。しかし、いつの間にかそうなってしまう。もちろん福祉先進国の北欧もそういう傾向があります。これは私たち本部の周辺の利用プロットです。高齢者の方や障害の重い方、あるいは働いている障害者の方、あるいは児童発達の方、ふらっと温泉に入りに来る人、クリニックに来る人、あるいは配食サービスを利用する人。先ほど42万人という話がありましたが、このプロットの人たちが日常的に使っているというのが、このごちゃまぜの拠点の面白いところです。

これ、ちょっと古いデータですけども、2018年、コロナの前ですが、この黄色い所が一般的な病院や施設の関係人口、いわゆるスタッフとサービスの利用者の合計数です。ところが、このごちゃまぜの拠点の面白いところが、このブルーの所です。医療も福祉も必要とない人たちがふらっとやって来て、学校帰りに立ち寄ったり、あるいは人と待ち合わせをしたり、温泉に入ったり、ビールを飲んだりする人たちがいる。これが42万人という、1日1000人を超える関係人口を生み出しています。人がつながるっていうことは、どういうことなのか。

私、金沢大学の医学部で公衆衛生学っていうのを教えています。公衆衛生学っていうのは、今で言う、例えば疫学的な、コロナとかインフルエンザとか疫学的なことを想定する人が多いと思いますが、人と人が関わると健康に大きく寄与するところの学問でもあります。人と人は関わるだけで、交わるだけで元気になる。そして、そのグループが元気なら元気だし、排除するよう

なグループは、やはり人は元気を失っていく。あるいは社会的な福祉サービスではなしに、人と人が支え合う、フォーマルではない支え合いが起こってくる。そんなことが、このごちゃまぜの拠点の大きな特徴としてあります。

これは宮城県の例ですね。これ見ていただけたら分かるんですけど、5万人、6万人というデータを7年間取りはじめて、これ、公衆衛生学の東北大学の先生に提供していただいた、ごちゃまぜの施設のエビデンスづくりのために持ってきたデータですけど、生きがいのある人となない人では、なんと7年間の生存率が3倍も違うという。生きがいというのは、人と関わって、お互いに何を目指すか。これはシカゴのデータですけども、人生の目的のある人となない人では、要介護になる率は倍も違うということです。従来の福祉や医療は、そういった状態になったときに関わりを増やしていく。しかし、地域には人と人が関わるだけで要介護になるリスクを半減させる力があるんですよ。私たちはごちゃまぜを、こういうふうに考えています。人がどれだけ関わられるのかな。そして、そういう場所は、以前はお寺や神社でしたが、私もお寺の住職ですけど、今、お寺にそういう力はないですね。来られる方は年配の方を中心としています。皆さんの周りにいろんな人がふらっと来るような場所がありますか。どうでしょうか。

日本人は、よくワークライフバランスって言うんですよ。しかし、ワークライフバランスって海外で言ったら、何だそれって言うんですよ、皆さん。みんな、ポカンとなるんです。何、日本人には家か職場しかないのって言われちゃいます。実を言うと、サードプレイスってないのかなって。イギリス人だったらパブです。フランス人だったらカフェです。家で嫌なことがあって、職場に持って行って、やっぱりなんか、もやもやしている。職場で嫌なことがあって、家に持って帰りたくない。そんなときに、ちょっと一杯ひっかけた帰るかなというときもありますよね。でも、毎日一杯ひっかけた帰ると、お金もなくなれば、健康も害してしまうっていうところもありますし、じゃあ

日常的に使える場所ってどうなんだろう。居心地のいい場所、皆さんありますか。なんかちょっと、もやもやするなっていうときに行く場所ありますか。定期的でも何でもないですよ。福祉サービスは何日の何時に来てください、何々をします。こんなこと全くないんです。来ても来なくてもいいんです。無計画、予定なんかない。でも勝手に来れる。そんな場所を考えてみよう。

これは、あるデータですが、首都圏ですね。日経の首都圏のデータですけど、退職後にあなたは自宅以外で定期的に行く場所がありますかという質問です。よく聞くと、居酒屋とかって言う人いるんですけど、定期的に居酒屋行ったら駄目ですよ。駄目ですよ。男女ともに1位は一緒なんです。定年退職して行く場所どこだっていうと、どこですかね。ここです、図書館。図書館はお金かららないですしね、好きな本読めますしね。でも決定的にあるのは、話しちゃ駄目ですよ。人と関わっちゃ駄目なんです。静かにしないと駄目なんです、原則はね。

ここから分かります。女性の2位、男性と分かります。女性の2位はどうでしょう。女性はウェルネス、スポーツジムに行っちゃうんですね。スポーツクラブに行っちゃうんですね。元気なんです。男性はどうでしょう。これです。なんですかね、男性は。見つからない。そりゃそうですよ。一生懸命仕事してきて、地域には何の関係もなく、急に仕事なくなったら、どこ行っているか分からなくて、分かんない、特にない。家にいると粗大ごみ扱いされる。そんなことになっているぐらいですね。

ここからは女性のぶっちぎりですね。女性の次はこれですね。もう、おいしいもの食べよう、飲もう。家族の皆さんとか親戚の皆さんとかお友達とかと、みんなでお茶しようって行くわけですね。男性は、さっきはもう見つからないとかっていう話でしたからね。男性はどうですかね、次、ちょっと期待して見てみますか。もうスニーカー脱いでいます、長居しよう。男性、公園です。行ってくるわって言って、行く所が公園だったりします。

こんなこと考えると、若年層ではなく、中高年の引きこもりが超えましたね、ついに。仕事を辞めたら、まずは引きこもっちゃった。人間関係うまくいかなかった。病気になった。それは当然なんですけれども、こういったことが特に圧倒的に男性に多い。8割方、男性です。それも長期間です。長期間の引きこもり。しかし人生100年時代です。どうしますか、60過ぎて、40年。我々の、今の日本に突き詰められている現状なんですね。

これは私たちの法人本部のプロジェクト。先ほど、西川さんという私たちの盟友ですね。実を言うと、一昨年亡くなられた。本当に残念でした。一緒にいろんなプロジェクトをやってきましたけれども、いろんなものが集約されています。ここにたくさんの人がやって来るわけですけど。水が流れていたりとか、お寺からお香の匂いがしたりとか、そんな中で、いろんな人たちが関わり合いながら暮らしていく。だんだん会話も進んだり、1人である人ももちろんいます。これは私たちのスタッフルームですね。この右側にいる方々は地域のおばちゃんですね。お昼ご飯を食べています。最近は夏だから、あんまりあれですけど、冬とかだと、私の部屋、すぐ隣にあるんですけど、ガラス越しに見えるようになっていて、場合によっては煮物の匂いとか漂ってきたりとか。

左のスキンヘッドの彼は今32歳、ダウン症候群で心疾患を持っていて、20歳ぐらいまでしか生きられないって言われて、お母さんが施設に入れないで、地域で暮らさせてあげたい、息子は人と関わるのが好きだから、リスクはあっても、ごちゃまぜの場所で住まわせてやってほしいということで、グループホームに住みながら拠点に通ってきています。下の子は自閉症。ずっと奥の人たちは私たちの職員で、ミーティングしていたりとかします。案外、大丈夫ですよ。ペーパーレスにして。最初はプライバシーを守れるかっていう問題あったんですけど、今のところ全く問題ないですね。ペーパーレスにすることによって私たちの業務を効率化できる。そういったことも分かってきました。

これは、本部のカウンター席ですね。先ほど動画の中で日本酒、飲んでいた人いたじゃないですか。この右側の子は、このごちゃまぜの拠点ができるまでは、すぐ、土日祝日になるとドラッグストアに行って万引するんです。僕は何回、警察署に行って、いや、そういう物を取るっていう、そんな感じじゃないんですって、ついつい心の中にある空白があったりすると、物、取っちゃうんです。すいません、勘弁してくださいって言うと、何回か許してもらったんですけど、いよいよ続けてしまうので執行猶予になりました。執行猶予になって、今度やると実刑判決で刑務所行きです。そんなときにごちゃまぜの場所ができた。それ以来、一回も盗ってないです。僕らの福祉技術は一切変わってないんです。でも、構ってもらってるわけでもないんです、彼は。ただ、みんなという、気配を感じてるだけなんです。彼、必要以上に聞かれるの嫌いなので、すぐどっか逃げてっちゃう。でも、一緒にいないと、物、盗っちゃう。

ホーディングといいます、ごみ屋敷。2人で暮らしていて、伴侶を失った男性です。ホーディングのほとんどは男性ですね。別に物を集めたいわけではない。心の隙間をどうやって埋めていいかわからない。ですから、こんなものは撤去しても、その問題を解決しなければ、また同じことになるんです。これをごちゃまぜの拠点で快事できる。いつの間にか執行猶予付いた彼は、執行猶予明けて、お寺の前まで掃除するようになって、地域の人におまえ出来過ぎで、飛ばし過ぎるとまたおかしくなっちゃうぞってひやかされてましたけど。

この真ん中にいるのは私の父親です。3年前に亡くなりました、80歳でした。4年前にレベル4のすい臓がんと告知を受けました。どうしようかなということで、もう化学療法とか外科的な手術はしないというふうに決めました。ですから、痛みだけは止めていきたいなということで、そういった方向性で、このときはもう告知された後ですけれども。この右側にいる彼は先ほどのスキンヘッドの彼、20歳までしか生きられない。こんなごちゃまぜの場所っていうのは、こうやってい

ろんな人が関わっていくわけですけど。地域の人が勝手に来て、演奏するんですよ。そうすると、それを見ながらいい気分になっているんですね。なんかいいなと。子どもたち、0、1、2の保育の子どもたちですね。様子を見ると、これは、うちのおやじが亡くなったのは9月ですから、これ2月ですね。これ見ていたら、何をしたかっていうと、亡くなる半年前ですよ、鬼になりました。本気で子どもを脅かして、泣かしましたね。この左側の奥にいる人も強度の自閉症の方です。

僕たちの中で、ごちゃまぜやるのに、雄谷さん、どうですか、一番何が問題ですかって言われて、縦割りの行政の問題っていうのはありましたね。高齢者は介護保険だし、障害福祉は例えば支援費だし。そうすると、違う制度の中で建物を建てたりすると、Share 金沢のときに言われたのは、高齢者の廊下は高齢者の廊下だと、障害のある人たちの廊下は廊下だから2本造れとか言われて、頭おかしくないですか。なんで、そんな高齢者の廊下とか障害のある人の廊下とか、そんなこと言ったら、それこそ差別じゃないですか。いや、でもそれは制度だからみたいな。でも、何とかいろんな人たちを巻き込んでクリアすることができました。今は共生型の、そういった制度ができてきましたので、そんな心配ありませんけど、でも、そんなものは突破できたんです。

ところが、自分たちの縦割りの意識みたいなものが非常にハードルになりました。保育士は保育士で、こんな所に自閉症の人が来たら、本気で突き飛ばしたりして、私たちは責任取れませんってなるわけです。誰が入ってくるかわかんない所で私たちは保育できませんっていう話になっちゃう。でも6年間、無事故です。今となっては、来てもらわないと困る。地域のおじいちゃんおばあちゃんとか認知症の人が来て子どもたちに関わると、子どもたちが、違う局面がいっぱい見えてくる。私たちでは、あんな能力引き出せない、あんな表情引き出せない。当然です。年も違えば、生きてきた背景も違えば、腰が曲がっていたり、話せなかったり、いろんな人と関わるから、子ども

たちはどんどん成長していくわけ。それが肥やしになって、どんどん大きくなる。

でも末期がんですから、症状が進んでいくと、たそがれることもあるんですね。ちょっとぼーっとするっていうね。それでも、地域の人が、雄谷さん、釣りでも行くかって言って連れてってくれたりとかね、そうすると、そのときは、もう、お大臣ですね。餌とか全部、この右側の人が付けてくれる。投げるかっていったら、投げるのも全部やらして、ただ巻くだけと。こんな釣りあるのかっていう話なんですけど、地域の中で、うんうんとかって言うたら、なんかそんなふうになるわけ。

いよいよこれは亡くなる2週間ほど前ですかね。鼻には酸素が入っていますし、点滴からはモルヒネ塩酸塩。つまり、局部麻酔では、もう痛みが止められない。ですから、脳をだますという。モルヒネを入れて痛みを緩和していくという療法に入りました。そうすると、モルヒネ強いですから、せん妄状態。いわゆる、いろんなものが見えたり聞こえたりする。だんだん、いろんなことがしどろもどろになったり、私たち家族は、そういったことの症状が出るにつれダメージを受けるわけですね。

ところが、この左側の人は就労A型、障害のある人たちで、独居高齢者の人のために配食を作っています。その人がやって来て、寝てる場合じゃないだろうって。うちのおやじはサントリーオールドが好きだった、昔から。今はいいお酒いっぱい出てきますけど、昔からサントリーオールド、だるまっていう、だるまを飲み続けてたんですね。そしたら、ぼんと渡して、寝てる場合じゃないだろう、酒飲めよって言われて、せん妄状態なんですけど、ぱあっと明るくなるんですよ。これ、さっきの執行猶予明けた人が来たんですよ。これ私、ちょうど病室にずっと付いていて、この後ろにいるわけなんですけど、なんかほそほそつと言うわけですよ、大丈夫かって。そうしたら、うちのおやじ、何て言ったかって言ったら、おまえらがこんなたくさん来るっていうことは、俺はもうすぐ死ぬっていうことだなんて言ったんですね。後

ろの2人はビビっちゃって、もう恐縮してるんですよ。この彼は、執行猶予明けた彼は何て言ったかって言ったら、そうかもしれないとか言っていました。面白いですよ。

そうすると、彼らが帰った後に、俺は水割りを飲むって言いだして、ばかですよ。鼻から酸素入れてモルヒネ点滴注射をしているのに水割り飲むって言いだしたんで。僕に氷持ってきてくれて言って、分かったって病院行って氷もらったら、こんな消毒臭い氷は駄目だって怒って、それでコンビニ行って富士山の伏流水かなんかのかち割り氷を買って、俺も作ったんですよ、水割り。そしたら、美味しい、美味いって飲み始めて、シャキンとしているんです。モルヒネよりサントリーオールドのほうがすごい。これ、サントリーの人に言ったら、いいコマーシャルになるんじゃないか。3杯飲みましたね。

60年以上ですね、10代から酒飲んでいいるわけですから、60年以上酒を飲んでいいる男の右腕は強いんです。この右腕の肘の下にタオルが敷いてあるでしょう。これは、どこでやっても、いつもタオルを下に敷いて、水割りを飲む。カウンターでもこうやって飲んでいた。これが3杯グワーって飲んで、そしたら、万が一のときがある状態ですから、病室のドア開いたままになっている。水割りグワーって飲んでいいるところを看護師とか担当医とか通り過ぎるんですけど、苦笑いですよ。雄谷さん、おいしそうですねって言って通り過ぎてく。本当にうまそうに飲んでいましたね。とはいえ末期がんですから亡くなった。このヤマモトさん、差し入れをしたヤマモトさんは、いつもここに座って、おやじはいつも左側に。別に会話してるとかじゃないんですよ。同じほう向いて、酒飲んでいいるだけなんです。オールドと、酒飲みのかせにまんじゅう好きだっていう、甘いもの好きだっていう。まんじゅうお供えしてくれて、献杯してくれたって。このヤマモトさんも4カ月後に亡くなりました。

そうすると、第3の男。さっき動画に出てきましたね。彼は、本当は超一流会社の部長まで行っ

た人なんです。ところが定年退職して、退職金を全部、ある飲み屋に貢いだので、奥さんがあきれ果てて、離婚されたんですよ。もう生活荒れちゃって、そのときにうちに来たんです。ほとんどアル中状態みたいになって、体も壊れてるわ、ところがうちにふらっときて、ここに雇ってもらえますかって言って、うちで働き始めた、ヘルパーさんとしてですね。これから立ち直りました。でも毎日、お銚子1本か2本だけは飲んで帰るという感じで、それが第3の男ですよ。うちのおやじがいて、ヤマモトさんがいて、第3の男。この3人、ろくに話してないんですけど、同じほう向いて酒飲いでる姿だけは、みんな知ってるんですよ。

今度2人分作って、何やってんのって、営業妨害だろうって。二つ、ずっとお客さん座らせられないんで、僕としたら複雑な、おやじの献杯してくれてるしって話がある。こういうのを、地域の皆さんが背中を見てるわけですね。僕は言われました、シバさんっていう、シバさん、理事長、ちょっとこっち来いって、何も言わんと飲めって。何も言わんと飲めって言われて、いいのつつって、きょうは俺のおごりだよ、1杯だけな。1杯だけですか。じゃあウーロンハイ下さい、ウーロンハイ頼んだんですね。それで、まあ、パーっと。そうすると今度、それを見ていた、この人はボディビルダーだったんですよ。ところが脳梗塞で失語したんですね。そしたらスマホで会話です。たまに会長の夢見ますってことを、また知らせてくるわけです。どうしますか。社会福祉法人もしてる理事長、生活破綻したヘルパーさんや、それから失語した人とか、いろんな人に励まされて。

頼んだわけじゃありませんよ。これは公的サービスですか、違いますよね。ソーシャルワークです。すごいソーシャルワークです。でも制度ではない。この日、第3の男は、またもう一人見つかるわけです。誰かと飲みたいのかなみたいなのがあるんですけど、この左の人は本当に障害の重い人で、物をばんと壊して、もうずっと入所施設にいた人ですけど、30年代、もっとですね。今グループホームで、うちで受けました。やっぱり物、壊

したり大変だったんですけど、いつの間にか座っているんですよ。彼も話せないんですけどね。でも、誰かにコントロールされるんじゃないくて、こういう中で、おまえも飲むかって言ったら、「うん」って言って飲む。そういったことで彼の問題行動もどんどん減って。

よくありますよね、寄り添うっていう。いよいよエンディングノートっていうものを意識したときに、病人に寄り添う。寄り添うっていう言い方もあるけど、寄り合うっていう感じなのかな。最近なんかそんな感じするんですよ。看取るとか看取られるとか言うでしょう。看取るって言うとか残された人のことを言いますし、看取られるって言うとか亡くなる人のことを言うんですけど、どうも違うんじゃないかって。人間は誰が先に死ぬかとか、生き残るかとかって分からない。そうすると、生きている間に、それが別に向き合ってくれっていうことでもなくて、気配を感じているというか。そういう、看取り合っているんじゃないのかな。そういう感覚が、このごちゃまぜの場所から、最近、僕が感じることなんです。

そんなことで、今、日本は、世界の少子高齢人口急減のトップランナーですね。でも、シンガポールや韓国、あるいは台湾、そんないろんなところが日本の後についてくる。私たちが今、この少子高齢人口急減にどう対応するかということが、今度私たちの後に続く各国の、何か明かりになればいいかな、そういうふうに思います。ちょうど時間となりましたので終わりたいと思います。本日はどうもご清聴ありがとうございました。



ごちゃまぜ

事業承継





「佛子園」の取り組み-1

1998年から街おこしに取り組む

日本海倶楽部〔1998年～〕



能登の高齢過疎地でビール醸造、 農福連携モデルで6次産業化

- 社会福祉法人による初めてのビール醸造事業化
- 働く場と機会が少ない能登で現地雇用を創出
- 日本初の福祉による耕作放棄地の復活と農地の維持
- 町営の宿泊客が15%増。
- 産直野菜市を開いての地域特産品の開発と販売



【施設型 生涯活躍のまち】

三草二木 西園寺〔2008年～〕



廃寺を地域コミュニティセンターに、 Share金沢プロトタイプ

- 障害がある人もない人も、子どもも高齢者も
みんなでつくるコミュニティ
- 少数特定の小さな町から人のつながりが徐々に広がる
- 人の関わりが密になり町の世帯数と人口が増加
(10年間で55世帯から75世帯に)









三草二木 西園寺



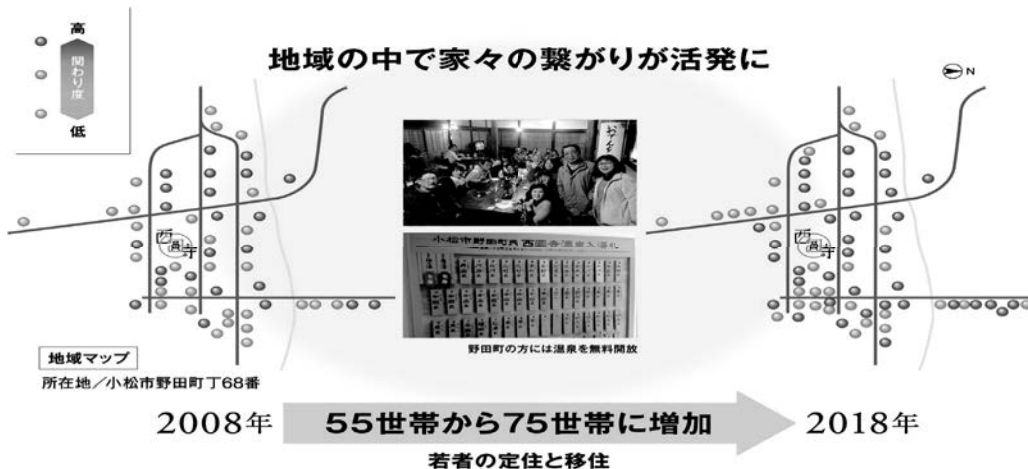
ごちゃまぜの力!

・小松市総人口	108,585人
・小松市総世帯数	41,082件
	2015年 4月現在
・野田町総人口	214人
・野田町総世帯数	69件
	2016年 4月現在



重度心身障がいの人と認知症の人が関わることで...

三草二木 西園寺



「佛子園」の取り組み-2

様々な地域コミュニティモデルを生み出す

美川37work
美川37café【2012年～】

駅の利用者が1.5倍に！
「みんなが集う駅」に変貌

- 駅の1日の利用者数が800人から1.5倍も増加
- 乗客以外に高齢者、障がい者の利用者が著しく増加
- カフェを中心にした地域コミュニティ拠点として多くの町民が利用

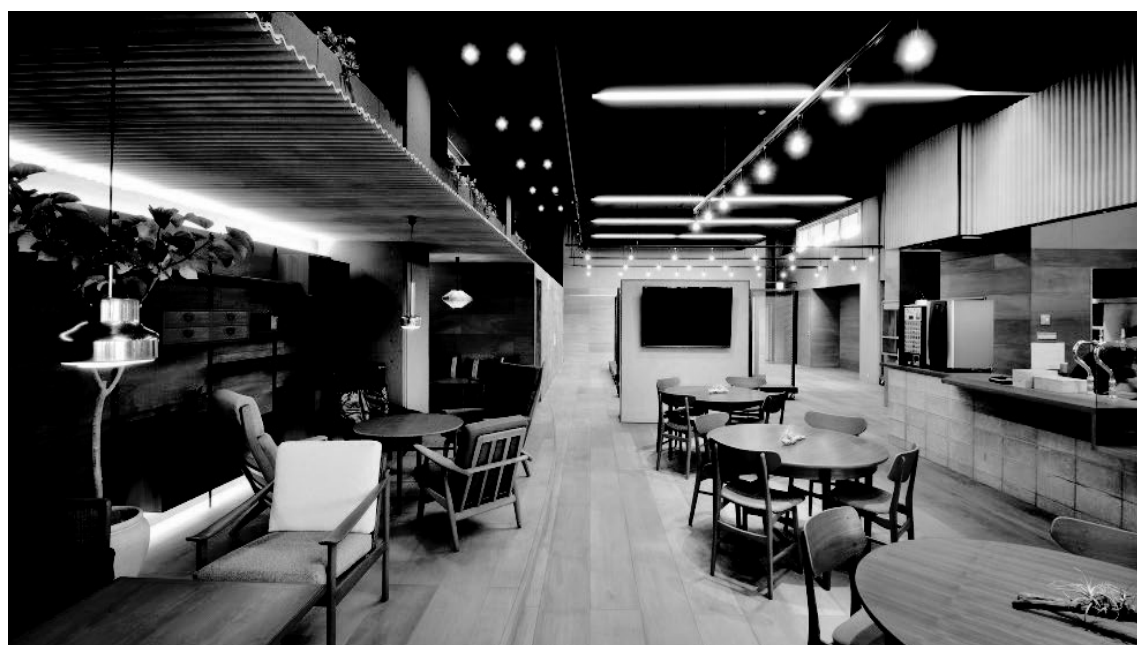


【エリア型 生涯活躍のまち】
Share金沢【2014年～】

日本版CCRC
政府認定モデル

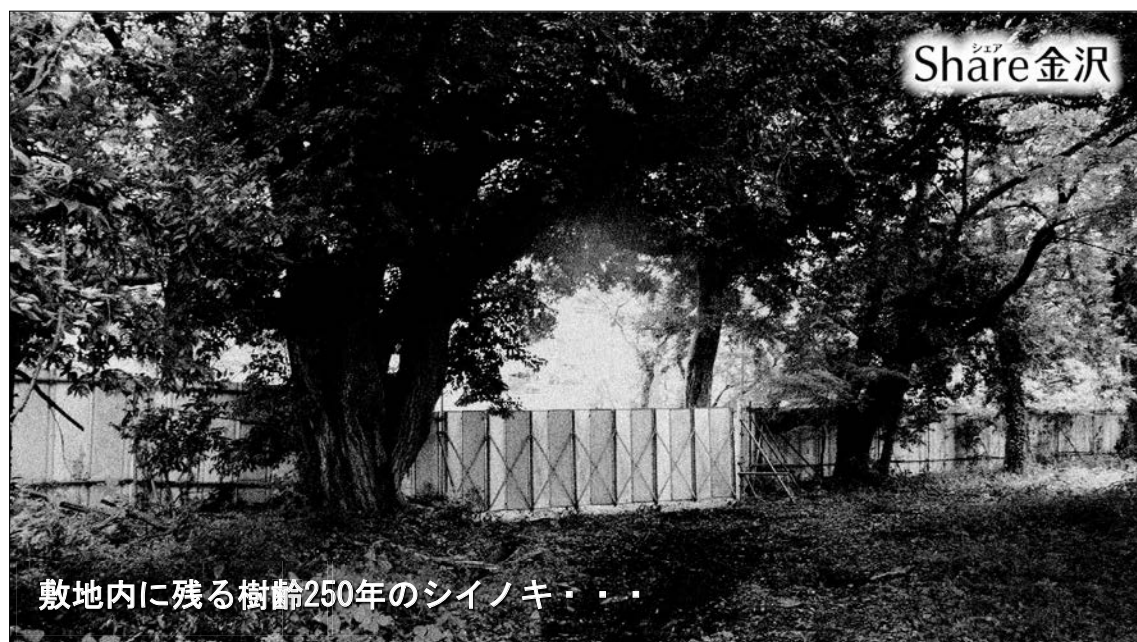
- 「生涯活躍のまち」No1モデルとして全国から見学者多数
- 高齢者、障害者、学生が共存、私がつくる街
- 高齢者が店舗の担い手として販売担当
- 学生がボランティア活動の担い手として活躍













Share金沢



2015年 4月11日 安倍総理



2017年 9月4日 萩山地方創生大臣



2015年 9月15日 増田元総務大臣



2018年 7月4日 野田総務大臣



自民党政調会 人生100年時代対策本部
// 一億総活躍推進本部

2018/03/29
2019/05/28



参議院 国民生活・経済に関する調査会
2019/02/27

「生涯活躍のまち」の閣議決定文書等での位置づけ

第2期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」（令和元年12月20日閣議決定）付属文書 政策パッケージ（抄）

【横断的な目標1】多様な人材の活躍を推進する

横1-2 誰もが活躍する地域社会の推進

（1）誰もが居場所と役割を持つ地域社会の実現

Ⅰ 誰もが活躍できるコミュニティの形成

(a) 年齢や障害の有無等を問わず誰もが交流できる地域共生型による多世代交流の場づくりやコミュニティとの関係も視野に入れた住まいの場づくりなどにより、制約の緩和を促し、「ごちゃまぜ」のコミュニティづくりを推進する。こうした取組の推進に当たっては、「生涯活躍のまち」の推進はもとより、地域福祉や健康関連の施策、地方就労・自立支援事業、2019年12月に改正された地域再生法に基づく地域住宅団地再生事業、まちづくりなどの施策、農業や商工施策、雇用関連の施策等を制度横断的に総合的に活用する。（内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局）

Ⅱ 新たな全世代・全業活躍型「生涯活躍のまち」の展開—誰もが活躍するコミュニティづくりの観点からの見直し・強化

（制度の縦割りを超えた「ごちゃまぜ」コミュニティづくりの推進等）

- (a) 誰もが居場所と役割を持つコミュニティづくりを強力に推進する施策として、「生涯活躍のまち」について必要な見直しと強化を図り、その徹底活用を図る。具体的には、これまで中高年齢者の移住に重点が置かれていた「生涯活躍のまち」について、有識者による検討結果等に基づき、移住者や関係人口と地元住民双方を対象とした「誰もが居場所と役割を持つコミュニティづくり」の推進や企業と連携した都市と地方との間の人材循環の推進などの観点を踏まえ、その位置付けを見直すとともに、施策の対象とする年齢層についても、中高年齢者に限らず、全世代型に拡充を図ることとし、国によるガイドラインや推進計画の策定など、そのために必要な措置を講ずる。特に、それぞれの「生涯活躍のまち」における「誰もが居場所と役割を持つコミュニティ」推進に当たっては、個々の施設というよりも、エリア全体の魅力向上や空間デザインという点を視野に入れ、「活躍・しごと」、「交流・居場所」、「住まい」、「健康」などの必要な機能の確保が図られるよう、国が定めるガイドライン等に明確化するとともに、関係省庁により構成される支援チームを活用するなどし、住宅、福祉、健康づくり、就労支援、まちづくりなど、あらゆる施策を分野横断的、総合的に活用し、関係省庁が連携した支援を行う。（内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局、文部科学省大臣官房政策課、総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課、高等教育局高等教育企画課、厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課、地域福祉課生活困窮者自立支援室、老健局高齢者支援課、振興課、職業安定局高齢者雇用対策課、障害者雇用対策課、経済産業省地域経済産業グループ地域経済産業政策課、商務・サービスグループヘルスケア産業課、国土交通省住宅局住宅政策課、安心居住推進課、土地・建設産業局不動産課、都市局都市政策課）
- (b) 誰もが能力を活かしてコミュニティの中で活躍できる新しい働き方を推進するため、新たな活躍推進型の就業支援モデルの確立と普及を図る。その際、都市部の企業等の業務プロセスの見直しやICTの活用等により、地方のサテライトオフィス等で都市部の企業の業務を受託するなど付加価値の高い仕事を増やす方策を、女性・高齢者等新規就業支援事業における官民連携プラットフォーム等を活用することなどにより推進する。（内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局、内閣府地方創生推進事務局）
- (c) プレイル対策等を含めて、いつまでも健康で活躍できるモデルの普及や、健康ポイントの活用などコミュニティビジネスとも関連させた健康推進事業の普及を図る。（内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局）
- (d) 障害者等による文化芸術活動について推進を図る。（文化庁地域文化創生本部）

○「生涯活躍のまち」について推進意向があると回答した地方公共団体：421団体
○「生涯活躍のまち」に関する構想等を策定している地方公共団体：132団体（前





空き家をウェルネスにリノベーション



空き家を再利用したママカフェ



遊郭がゲストハウスに



遊郭の面影を残す丸窓



蔵はコワーキングスペースに

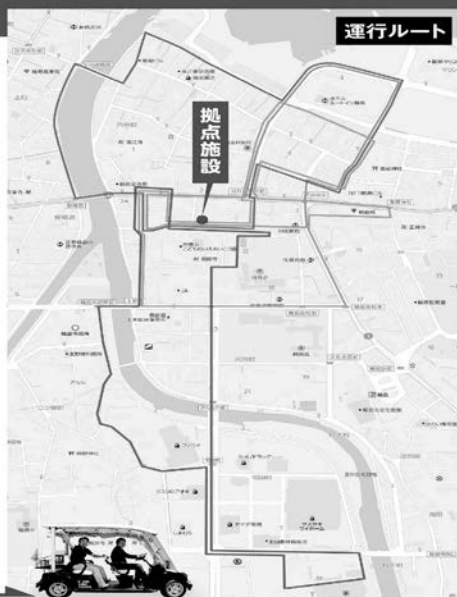


バイカーが集うガレージハウス



新交通システム

2018年 7月より 電動小型低速車の 活用に向けた実証実験 開始



天然温泉「三ノ湯」「七ノ湯」

温泉が関係人口の増加に一役買っています

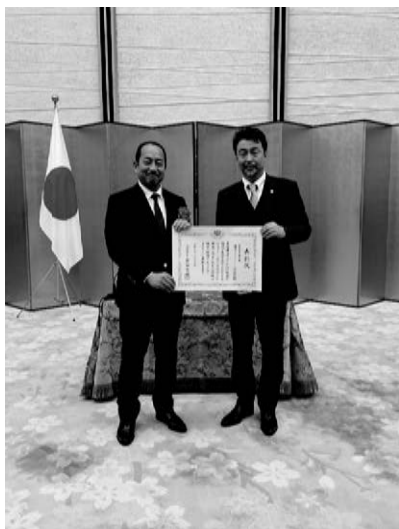
自社源泉を持たない
宿泊施設が総湯的に利用

観光客

地元住民

近隣住民209世帯
ウェルネス会員 入浴無料





輪島カブーレ
バリアフリー推進
初の総理大臣表彰
佛子園運営

内閣府の今年度バリアフリー・ユニバーサルデザイン推進功労者表彰で、佛子園（白山市）が運営する輪島市河井町の複合施設「輪島KABULET（カブーレ）拠点施設」が県内で初めて最高賞の内閣総理大臣表彰に選ばれた。

輪島カブーレは、空洞化した中心市街地の活性化や地域「コミュニティ」へリ

の拠点となっていることが評価されたほか、障害者や地域住民に就労の場を提供している点なども認められた。

表彰制度は2002年度に始まり、県内の受賞は6年ぶり4件目となる。

青年海外協力協会 地方創生戦略
「輪島KABULET」に続く第2弾！

IWANUMA WAY

道を拓け！！





地方創生「岩沼プロジェクト」の推進

事業コンセプト

元気な岩沼

- 被災地を元気にする
- 日本を元気にする
- 世界を元気にする

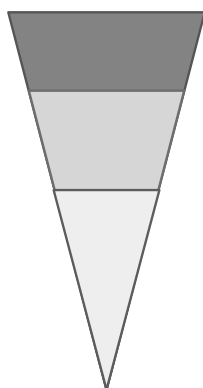
【事業背景】

岩沼市の地方創生事業を「青年国内協力隊」が担う

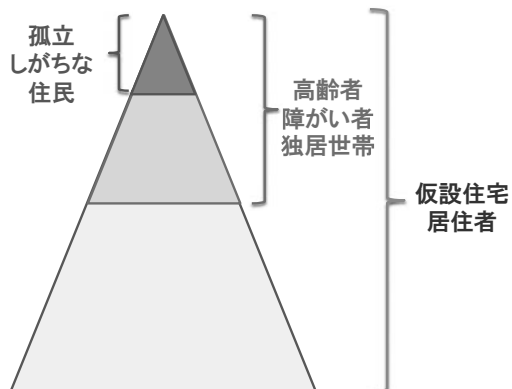
▼
 亀塚市営住宅跡地 公設市場跡地 の復興・再生
 玉浦西地区 災害危険区域



関わる頻度



居住者







ごちゃまぜ

= Social Inclusion

社会的排除

⇔ Social Exclusion



B's 行善寺 関係人口

■ 地域交流
■ 福祉



「つながる」!?

人と人のつながる力・・・

ごちゃまぜ

第三の医療

Behavior Health
公衆衛生学 Public Health

ごちゃまぜ

人と人とのつながりと健康のメカニズム

- ①人と交わるだけで健康になる
- ②つきあう人やグループでその人の行動が決まる
- ③人とのつながりからうまれる支援(ソーシャルサポート)

生きがいと生存率の関係

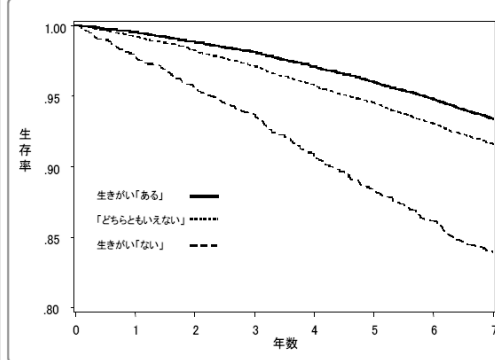
生きがいのある人は、生存率が高くなる傾向にある。

対象者:
宮城県大崎保健所管内1
市13町に住む国民健康保
険加入者のうち、1994年
10-12月時点で40-79歳の
者全員(54,996名)

質問:
あなたは「生きがい」や「は
り」をもって生活してい
ますか?
(全体:健康状態、生活習慣な
ど12ページのアンケート)

回答:
「ある」= 25,596名 (59.0%)
「どちらともいえない」
= 15,782名 (36.4%)
「ない」= 2,013名 (4.6%)

追跡調査:
死亡・生存、死亡年月日と
原因を9年間にわたって調
査



(Sone T, et al: Psychosom Med, 2008;70:709-715)

(資料出所) 日本版CCRC構想有識者会議(第1回)辻一郎委員提出資料

14

「人生の目的」と要介護発生リスクの関係

「人生の目的」がある高齢者は、要介護になりにくい傾向にある。

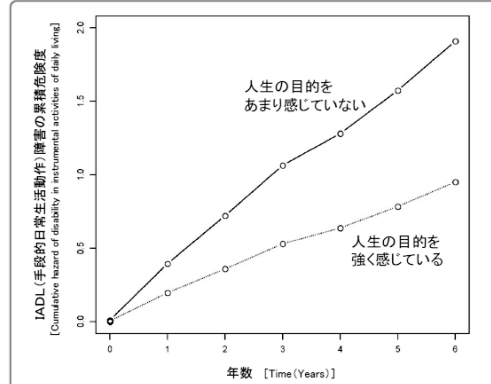
対象:
米国シカゴの40カ所の高齢
者住に住む人々で認知症・
要介護状態のない人々
(N=970)

調査:
心身機能(認知機能・生活
自立度など)、「人生の目
的」があるかどうか、など

追跡調査:
生活自立度などを毎年

追跡期間:
平均4.5年

結果:
「人生の目的」がある高
齢者では要介護の発生
率が約40%低下



(Boyle PA, et al: Am J Geriatr Psychiatry, 2010;18:1093-1102)

(資料出所) 日本版CCRC構想有識者会議(第1回)辻一郎委員提出資料

15

ごちゃまぜ

関係人口

×

居場所づくり

Work Life Balance ?

3rd Place 居心地のいい場所

定期的に...

いつ行くか決まっていなかったり...

何日もご無沙汰したり...

ちょっと立ち寄るだけだったり...

店の立場からすると...

客の来る時間も帰る時間もまちまち...

その時々で顔ぶれも違う...

常連がいたり...

無計画で...

予定外で...

まとまりがなく...

型にはまらない...

でも、とびきり居心地がいい！







退職後の居場所 「あなたは自宅以外で定期的に行く場所がありますか。」

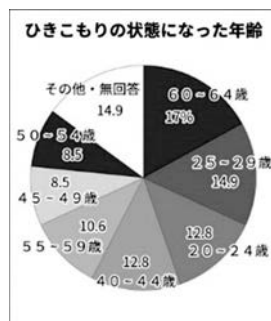
…首都圏に住む60～74歳の男女1236人へのアンケート調査
『超高齢社会の実像』調査報告書(2014/9) 日本経済新聞社・産業地域研究所

- 男女ともに1位は… 『図書館』
- 女性の2位は… 『スポーツクラブ』
- 男性の2位は… 『見つからない／特にない』
- 女性の3・4位は… 『親族の家』『友人の家』
- 男性の3位は… 『公園』

71

中高年ひきこもり61万人 内閣府が調査

内閣府は、自宅に半年以上閉じこもっている「ひきこもり」の40～64歳が、全国で推計61万3千人いるとの調査結果を発表した。7割以上が男性で、ひきこもりの期間は7年以上が半数を占めた。15～39歳の推計54万1千人を上回り、ひきこもりの高齢化、長期化が鮮明になった。



ひきこもりになったきっかけ (上位5つ、複数回答)	
退職した	36.2%
人間関係がうまくいかなかった	21.3%
病気	21.3%
職場になじめなかった	19.1%
就職活動がうまくいかなかった	6.4%
(注) 40～64歳、内閣府調べ。	

※調査は2018年12月、全国で無作為抽出した40～64歳の男女5千人に訪問で実施。3248人から回答を得た。人口データを掛け合わせて全体の人数を推計した。

72















ごちゃまぜ

看取る ⇄ 看取られる

看取り合う

ごJAPAN WAYまぜ